

『心敬の世界』

両角倉一

心敬を主な対象にして連歌の研究を続けて来られた岡本氏が、このたび、既発表の論考を一書にまとめられた。本誌『論究日本文学』や『立命館文学』『ポトナム』などに分載されたものであるが、この上梓によって容易にその全貌に接する事のできるようになったのを嬉しく思うものである。本書は、第一章「連歌」、第二章「心敬」、第三章「連歌私抄」の三章より成る。以下、その概要を紹介しつつ、読後の感想を述べてみたい。

第一章は連歌一般より三つの問題を取りあげている。第一「文芸意識の諸側面」は、短連歌と長連歌の性格を「問答」「遊び」「一座性」「一回性」などの諸側面からまとめた序説ふうの編。諸家によって通時的にも共時的にも詳しく追求されている根本的な問題であるだけに新説を出しにくい所であるが、穏当なまとめである。第二「付合の意識」では、連歌の付合で短句（七七）より長句（五七五）に続く場合に長句→短句と逆置して読む和歌の上下句意識があったかどうか、という点を論じており、その意識は原則としてはないはずだが、和歌的情趣の濃厚な純正連歌に

あつては、その意識の混入する場合がある、と結ぶ。第三「連歌と『万葉集』」は、両者の結びつきを言う旧説に対し批判を加えたもの。第二、第三、共に結論には同感である。第二に關連しては付合一般論を、また、第三に關連しては『古今集』『新古今集』と連歌という詳論も書きおろして加えていたが、第二に關連しては、心敬の付合論や『新古今集』への関心については第二章で触れる部分もあるので、意識的に省略されたのかも知れない。

本書の中心は、やはり、心敬をとりあげた第二章であろう。第一「序説」、第二「美的理念——『やせ、さむく、ひえ、こほりたる』もの分析」、第三「思索的特質」、第四「創作の方法とその意義」、第五「文芸的態度」、第六「批評意識と批評実践」、第七「心敬と芭蕉」、第八「鳥瞰の見取図」という内容で、心敬への多角的な接近が見られる。第一の「序説」では連歌を「閉ざされた場における文芸」と性格づけている点に注目される。大筋においては賛成であるが、次のような考え方もできるのではなからうか作品としては比較的に等質の文芸であるけれども、連歌の張行の座そのものは異質な人々の寄り合う開かれた場としての性格をも逆説的にあわせ持つ、と。

第二「美的理念」の分析は、質量ともに、本書の中でもっとも備わった一編で、荒木良雄氏著『心敬』（昭和23・2）のすぐれた感性が継承され発展されている。この第二から第六までの各編で心敬の連歌論の主な問題はほとんど論じられていっていると見てよいであろう。第七「心敬と芭蕉」は、両者の相似に重点を置く従来

の論考に対し、その相違に力を入れて考察した一編。その態度は、第八の1の発句「日の御影花に匂へるあしたかな」を扱った断章にも一貫している。

第八「鳥瞰の見取図」1〜9は短歌雑誌に載せたものだけに平明なエッセイふうの文章である。内容としては6〜8など他の部分とやや重複している所もあるが、あわせ読まざるべきものであり、特に1〜5の心敬の発句・付句・和歌をとりあげて鑑賞した文章を読むのは楽しい。2の項では、心敬の代表的な付句、

我心たれにかたらん秋の空

萩に夕風雲にかりがね

「たれにかたらん」とすがりつきそうな前句を、心敬は二つの景、景ともいえない概念、いや概念といつては強すぎる、二つの纏渺たる感慨を蔵したことばのかたまりだ、それをぼつんとぶちつけることよって冷酷にもつきはなし、そしてあたたかく拾いあげている。『新古今』の歌（大藏卿行宗「身のほどをおもひつづくる夕ぐれの萩の上葉に風わたるなり」など）では出ない味である。このあまりにもありふれた秋の景物二つが、前句に寄ることによって、かぎらない生氣を得る。ここが連歌の神髓であり、心敬の手腕であった。

というくぐりだり、魅力のある文章である。この付合は、岡本氏のように心敬の言う疎句付の典型として解釈されるのが普通であるが、木藤才藏氏著『連歌史論考、上』（昭和46・11）を対象とした

金子金治郎氏の書評（『国語と国文学』昭和48・3）で、古注『竹林抄聞書』の解釈を受けた「萩と夕風、雲と雁は、それぞれたがいに語り慰む便りもあるが、わが秋の悲哀は、この虚空のどこにも訴えようがない。」という別解を提示された事も想い起こされる。両氏の驥尾に付して第三の試解を左に記す事を許されたい。

この前句は、一句としては述懐の句で、「我心こゝろたれにかたらん」が主で「秋の空」は従の立場の添景。その述懐の内容は、「秋」の語の感化的内包（情報的内包の対語）と響き合う不如意の恋心を「忍ぶればくるしき物を人しれず思ふてふこと誰に語らむ（よみ人しらず）」（『古今集』恋歌二）という和歌と同系の吐息として洩らしているようにも思えるし、また、一般的な述懐の心を秋の虚空に触発されて述べているようにも思える。現存しない長連歌中の打越の句（前句の前の句）との一連では明確であったであろうこの前句の趣意は、長連歌の行様から切り離された一句としては、いわゆる詩的あいまいさを持つ。その前句を付句と一連のものとする、従の立場にあった「秋の空」が主の立場に転移し、「我心こゝろ」が秋の夕暮の天地の景物の哀感に酔いしれる心ととりなされ、「女郎花はなの盛りにあき風のふく夕ぐれをたれに語らむ（よみ人しらず）」（『後撰集』秋歌中）といった趣に近くまとめられる。『心敬句集苔蘚』で面白体に入れているのはそのようなとりなし方を意識しての事ではなからうか。宗長著『雨夜記』では「前句にいへる事の端的の事を付けたる句」として掲出している。岡本説は、付句への寄り所としては「秋の空」のみ

にとどめ、他は不即不離とし、金子説は「誰にかたらん」に對應する糸のからみ合いを見ており、私解は「我心」まで「秋の空」や付句の映像に引きつける、もっとも親句付的な解釈である。

さて、本書の第三章は、享徳二年三月十五日張行『何路百韻』と『侍公周阿百番連歌合・心敬連歌百句付』の注釈である。『何路百韻』をとり上げた理由は、宗砌・忍誓・行助・専順・心敬と並ぶ連衆の顔ぶれによるものようである。全訳でないのが惜しまれるが、著者の興味を引いた付合について三句の渡りに留意した注解がほどこされている。次の『連歌合・百句付』については、福井久蔵氏の全訳があるが、『連歌文学の研究』昭和23・3、その簡略であるのに対し、岡本氏のこの注釈は、選積ながら詳細にして丹念なものである。心敬の付句の特色を、

又こがるゝに春のわかれぢ

秋とをく花野のいろのかすむ日に

のひねりをきかした難解な作様、

秋をしれとや鹿の鳴らん

高砂や松ふく風は色もなし

の「もなし」の句末表現、

杉の木間に雪ぞ見えける

明そむる横川の遠の比良の山の

景曲、

ちかく見えたる杉の村立

朝まだき山本あをき雨晴て

の青の表現などと適確に指摘し、侍公（『救済』・周阿の付句との比較を試みている。あとがきに述べられている「注釈を通して作品論をやろう」（二九一ページ）というねらいの一端は果たされていると思われる。この『心敬百句付』からは宗祇の手によって二十七句が『竹林抄』に選ばれ、十句が『新撰菟玖波集』に再録されているのであるが、『竹林抄』入集句については他の古注を援用されてもよいのではなからうか。また、この『百句付』の中には、「夢もあだなる手枕の露／うたたねをいさめがほなる小夜時雨」（大阪天満宮文庫本）→「夢もあだなる手枕の露／雲となるなごりかなしきさ夜時雨」（天理図書館本）という句形の異同もあり、「こよひの風の何とふくらん／くれぬとて帰りし花の山里に」という付合について、心敬の作意と宗祇の享受との間にズレの見られる例もあって、『心敬百句付自注』『雪の烟』『竹聞』参照、種々な点で問題になる作例が少くない。そのような意味からも、岡本氏の詳細な注釈が『連歌合・百句付』の全体に及ぶ事を希望しておきたい。

心敬の魅力は、第一に評論と随筆的散文、第二に連歌、第三に和歌という事になるが、従来は連歌論の研究が先行し、連歌や和歌の表現研究については、やや軽く扱われていた嫌いがないではない。しかし、近年の連歌研究においては、作風の検討をふまえた連歌史が書かれるようになっており（伊地知鐵男氏著『連歌の世界』昭和42・8や前掲の木藤才蔵氏の著書など）、特に心敬の研究についても、横山重氏編『心敬作品集』（昭和47・3）の刊行の前後に、

稲田利徳氏稿「心敬の和歌表現の特性——言語の重層効用——」

〔『中世文芸』45、昭和44・11〕、山根清隆氏稿「心敬の作風」〔『広島音戸高校紀要』4、昭46・3〕、同右「心敬における心情表現」〔『玉くげ』昭和47・10（49・5）〕など、和歌や連歌の作品そのものの表現分析を主とする注目すべき論文が発表されている。岡本氏は、本書の第二章で連歌論に重点を置いた論述を展開しながら、第三章において連歌の作品の検討に重点を移し、本書の刊行後も心敬独吟連歌百韻の注釈に手を付けておられる。この事は、右に述べた最近の連歌研究の動向を考え合わせると、きわめて興味深いものがある。

以上を要するに、本書は、連歌一般論にも触れているけれども、書名の示すごとく、著者の得意とする心敬を主な研究対象にしたものである。氏の心敬観を端的に示すのは、第二章第一「序説」

に記されている「孤高な文芸家」(七二ページ) という言葉であらうか。連歌文芸の本来的に保有する「衆」に対する「孤」への傾斜という心敬の把握の仕方は、その秀抜な連歌論書に見られる文芸性志向から見て説得性があり、連歌史の中における心敬の位置をそのように見るのは、魅力的で大方の支持を得られる事であろう。にもかかわらず、心敬における衆とのかかわりをもっと掘り起すべきではないか、という天の邪鬼な考えも私の心の中にはあって、心敬における孤と衆との交錯の問題が、私としては整理できないままになっている。この事は心敬の実作活動や『私用抄』の著述などから感じるささやかな疑問感想であるが、この点についても、あらためて岡本氏の御見解をうかがう事ができれば幸甚である。(昭和四十八年九月十五日刊、桜楓社)

(もろずみ：そういち 山梨県立女子短期大学助教授)